
秋空は澄んでいるのに

ぱんだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋空は澄んでいるのに

【Zマーク】

Z0025Z

【作者名】

ぱんだ

【あらすじ】

彼女は旅に出た。
発端は一眼レフカメラ。
思い出を作る為。
思い出を切り取る為に。

(ブログ掲載作品)

一
回

私、旭八千代は旅に出た。

アサヒ ヤチヨ

旅とか言つと格好良いけれど、只の旅行。
発端はカメラ。

夏の太陽が輝いていたあの日。

ウインドウショットピングをぶちかましていたあの日。

そんな時。

古いカメラ屋の前を通り過ぎた。

通り過ぎたんだけれど。

とある何かが気になつて戻つた。

閉店セールと書かれた小さなカメラ屋のショーウィンド。

小さな一眼レフカメラが目に入つてしまつた。

とても綺麗で。

何故か惹かれた。

私はカメラになんて興味なかつた。

携帯電話で十分。

てゆーか、機械音痴な私に文明の利器であるカメラなんて扱える訳がない。

携帯電話のカメラですらボケる。

友達には奇跡だと笑らわれる。

何で勝手にピントを合わせてくれるカメラのピントがずれるのかも分からぬけれど。

何故かボケる。

たまに撮れても酷い写真ばかり。

そんな私がそのカメラを欲しいと思つてしまつた。
思つてしまつたから店に入った。

カラシコロソとレトロな音がした。

なんかいいな。

こういう古いお店がなくなっちゃうのはさびしいな。
なんて。

よくも知らないお店の事思つたり。

店内は古いカメラがずらりと並んでいた。

「いらっしゃいませ」

カウンター越しにおじさんが私に声を掛けってきた。
店主かな?

「あ、あの」

「何かお探しで?」

「その。えーと。窓の所の小さい奴が…」

「うーん? ああ。ほいほい。ちょっと待つて」

「はい」

店主はカウンターから出てきてショーウィンドーに飾られた猫の人形を手に取った。

「これかな?」

ちげーよ。

「いえ。あの…」

「ほつほつほ。冗談冗談

「あ。あははは」

「冗談きついよ。

店主は茶色い皮の貼られた小さな一眼レフカメラを手に取った。

「これかなお嬢さん」

「はー!」

「お田が高いね。」これはあんまり人気ないよ
「…」

人気無いんだ。

じゃあ、お田が高くないじゃん!

「でもね。良いカメラだよ。とっても良いカメラだ。お嬢さんの思
い出になるよ」

「えつと」

「さあ、どうぞ」

そう言つて私に小さなカメラを渡した。
小さいのに重くて。
それでなんか。
何で言つていいのか分からぬけれど。

「これ。ほしいです」

「そーかい。そーかい。よく見ないで良いのかい?一応ちゃんと整
備したつもりだけど」

「ん?」

「古いカメラだからね。買う時はよく見るものだ」

「あ。そーなんですか?ごめんなさい。私がカメラ買うの初めてで」

「うーん。じゃあ。そのカメラは難しいかもね
「難しいんですか?」

「一応絞り優先ができるけど。レンズはマニュアルだからね
「えーっと」

「それと。分かってると思つたけど。これ銀塙だからね」

「銀塙？」

銀鮭塩焼きって事?

私鮭好き。

「フィルムだよ」

「フィルム！」

「ほつほつほ」

「どーしょ。でもこれ。何かな…」

「良いんじゃないかい? 気に入ったのなら。楽しいよ」

「楽しいですか」

「そうだよ。楽しいよ」

そう言つて色々教えてくれた。

フィルムの入れ方。

変なボタン説明。

ピントの合わせ方。

露出?

何かよく分かんないけど。

すっごい楽しかった。

とつても楽しかった。

「どーするかい? 買うかい?」

「はい! 買います」

「じゃあ…

がはつ!

なんつー値段!

そーなの?

カメラつてそんな高いの?

無理無理。

無理無理無理無理。

ちよつとちびるといひだつた。

てゆーか、若干ちびつたかも。

大丈夫！

ちびつてない。

あーよかつた。

あははは。

貯めよう。

そうだ、貯金だ！

貯金魚！

「あの……」

「なんだい」

「買えませんです」

「そーかいそーかい。それは残念だね」

「はい。どつても残念です。ごめんなさい。買えもしないのに時間

とらせちゃつて」

「いや。いいや。楽しかったよ」

「…」

私はふと思いついた。

「そーだ！このカメラに合づのフィルムください！」

「なんでだい？」

「このカメラ買うためにお金貯めます。だからフィルムだけでも買っておけば目標になるかなつてゆーか。なんとゆーか」

「ほつほつほ。そいつはいい考えだお嬢さん。ほれ。そのワゴン

「これ？」

「そーだよ。そのワゴンの中ならどれでも大丈夫だ。全部一千円均

一だ

「ほんとですか！」

私はワゴンの中から適当に。
ほんと適当に選んだ。

「これにします！」

「おつと？それはリバーサルだな。こんなに入れてあつたつけ？まあいいか。現像割高だよ。いいのかい？」

「割高…」

カメラ屋さんが割高つて。
超えるのか。

千の位は余裕で超えるのか！
まさか万の位まで。
あり得る。

ちょっと震えてきた。

いやいや。

これは武者震いだ。

あれ？

ちびつた？

大丈夫！

まだちびつてない。

「何おびえてるんだい。千円しないよ

「へ？そーなんですか！」

「そーなんですよ。じゃあ、これで良いかい？お嬢さん

「はい！」

「良い返事だな。んじゃサービスするしかないね」

そう言つておじさんはフィルムを小さな紙袋に入ってくれた。
カウンターの下から少し大きな袋を取り出す。
そこにフィルムを入れてくれた。

でか過ぎじゃね?袋。

更に。

カメラを丁寧に包む。

丁寧に包まれたカメラは、その大きな袋へと入れられた。

「サービスだ」

「おじさん!」

「おこおこ。僕はお爺さんだよ」

そこかい!

「お、お爺さんダメですよ。そんな高価なもの
何だ要らないのかい?じゃあいいけど

「欲しいです!」

「じゃあ持つてこきなさい。閉店サービスだよ」

「あ…。ありがとうございます!」

「良い返事だね」

そう言つてお爺さんは笑つた。

とっても楽しそうに。

私は何度もお礼を言つた。

お爺さんは何度も笑つた。

楽しかつた。

帰り際。

「写真撮つたら現像に持つてきますー。」

「いや。持つて来てもな」

「ん?」

「今日でお店終わりだからね」

「嘘!」

「いやいや。本当さ。閉店セール」

「あ…。閉店セール」

「そーゆー事さ。今日で僕のバイトも終っただ

バイトだったんかい!」

じじい「ノノヤロー!」

大好きだコンチキシヨー!」

だから。

だから私は何度もお礼を言った。
お爺さんはやつぱり笑っていた。
最後にお爺さんは言った。

「写真是時間も場所も切り取れる、思い出製造機械だ。いっぱい思
い出作りなさい」

そして笑つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0025z/>

秋空は澄んでいるのに

2011年11月30日12時57分発行